

助産学生の妊産褥婦へのほめ言葉に関する調査

富安俊子¹⁾ 佐藤道子²⁾ 伊藤純子³⁾

An investigation into words of praise given by midwifery students to pregnant, birthing and puerperal women

Toshiko Tomiyasu¹⁾ Michiko Sato²⁾ Junko Ito³⁾

1) 活水女子大学 看護学部 2) 元聖隷クリストファー大学 看護学部
3) 聖隷クリストファー大学 看護学部

要 旨

助産師の役割は、妊産褥婦の主体的な分娩・育児の支援である。そのためには、状況に応じて言葉を掛けることが必要で、中でもほめ言葉は重要である。助産学生が適切な場面でほめ言葉を使えば、対象の自信や自尊感情を高め、主体的な分娩や育児につながると考える。そこでA大学助産学生34名を対象に、実習前後のほめ言葉の創出数と内容の調査を行った。調査①あらかじめ持っているほめ言葉、調査②ブレインライティング(BW)前のほめ言葉、調査③BW後のほめ言葉の調査を実習前後に実施した。分析は、t検定、 χ^2 検定で、内容はA.B.スクロームで分類。結果、あらかじめ持っているほめ言葉数は、実習前調査① 7.6 ± 2.3 、② 7.4 ± 4.4 、③ 11.1 ± 4.3 、実習後調査① 10.5 ± 4.2 、② 11.2 ± 3.8 、③ 17.0 ± 4.0 で、全調査で実習前より後に有意に多く、ほめ言葉の実習前内容記載数219、実習後324、前後ともMIQが他のIQより多かった。MIQが高かったことは、助産の特徴で、一般的なほめ言葉の想起と考える。

キーワード：助産学生 ほめ言葉 ブレインライティング 創出

I 緒言

近年、医療の高度化、疾病構造の複雑化、社会に生きる人々の健康に対する意識の向上に伴い看護も高い専門性が求められている。看護教育においては、高い看護実践能力の育成は重要な課題である。臨床の場では、人々の高い健康への志向と価値観の多様化に伴う多様なニーズに対応できる力、すなわち、その時・その場を得た独創的ともいえる看護実

践力、「看護を創造する力」の育成が求められている¹⁾。看護の中では創造性や共感性という言葉がよく用いられる。このことは、助産教育においても同様なことであると考えられる。これを実現させるためには、助産師自身の個性や創造性を伸ばす教育が必要であると考えられる。

青木²⁾は、ある場面や目的に応じて、最も適切な「ほめ」を用いることの重要性と、

ほめることがポジティブな結果を生むという常套的な見識が繰り返されているという指摘もあるほどに、よいほめ方に関する情報は、育児や教育関連の書籍や雑誌に取り上げられていることを報告している。

また、弓野³⁾は、教育には、「ほめ方」がカギになると述べている。助産教育においても、「ほめる」ということは、魅力ある個性や創造性を備えた助産師を育成するうえで、重要な教育の1つであると考え。そこで、弓野らと同様に、A.B. スクローム⁴⁾の提唱した7つの個性的能力に着目した。その能力は、①アカデミックIQ (Academic intelligence quotient : 以下AIQと略す) ②創造性IQ (Creativity intelligence quotient : 以下CIQ) ③巧緻性IQ (Dexterity intelligence quotient : 以下DIQ) ④共感性IQ (Empathy intelligence quotient : 以下EIQ) ⑤判断力IQ (Judgment intelligence quotient : 以下JIQ) ⑥モチベーションIQ (Motivation intelligence quotient : 以下MIQ) ⑦パーソナリティIQ (Personality intelligence quotient : 以下PIQ) である。また、弓野³⁾らは、ほとんどの子どもは、少なくとも1つの優れた能力があり、教師や親がそれらの能力をほめることにより、子どもに自信を与え個性や創造性を伸ばす可能性を増すことが期待されると述べている。

A大学における助産学専攻科の教育目標は、女性・乳幼児・家族・地域社会を対象に健康問題解決や発達課題の達成のための高度の実践力と対象者を全人的に理解し寄り添い、助産師として自律し、自立した専門職としての役割を遂行する力を有する助産師を育成することである。中でも助産診断・技術学実習科目において、妊娠期・分娩期・産褥期と新生児期の助産過程の展開、健康診査と保健指導を通して、助産師としての役割を深め、

知識・技術・態度を学ぶことを内容として実習を展開している。指定規則に基づき10例程度の分娩介助を行うことが義務づけられている。つまり、正期産、経膈分娩、頭位単胎の分娩第1期から第3期終了より2時間までの分娩を取り扱う必要がある。助産師の役割は妊産褥婦が主体的に分娩や育児に臨めるように支援することである。そのため、助産師は、妊産褥婦の多様な個性や価値観を尊重し、その人らしい分娩・育児への支援のために、“妊産褥婦に対するほめ言葉”に注目した。

助産学生は、妊産褥婦が主体的に分娩や育児に臨むために、妊娠、分娩や育児に対する不安感を軽減するため、個別的な対応をしていくことが必要である。そして、産婦が安心して、分娩に臨めるように身体的だけでなく、精神的な環境も必要であると考え。そのために、助産学生が多くのおほめ言葉をもち、それを適切な場面で適切に使うことができるのであれば、妊産褥婦は自信や自尊感情を高めることができ、主体的な分娩や育児につながると考える。

そこで、今回の調査は、助産学生のほめ言葉の実態を明らかにすることとした。

II 目的

助産学専攻科学生を対象に、助産学生のほめ言葉を明らかし、実習前と実習後のほめ言葉の創出数とその内容の変化について検討した。そして、今後の助産教育の基礎資料となることを目的とした。

III 研究方法

1. 調査対象

A大学看護学部助産学専攻科学生34名を調査の対象とした。

2. 調査期間

調査期間は、2010年5月～助産診断・技術学実習の終了した2012年1月末日までとした。

3. 調査方法

1) あらかじめ持っているほめ言葉の調査(以下：調査①)

あなたが、妊産褥婦さんをほめるときどのようにほめますか？実習で妊産褥婦さんと接している場面をイメージしてできるだけくさんのほめ言葉を箇条書きで書いてください。と記入したワークシートを用いて、4分間の制限時間で記入してもらうように依頼した。日本創造学会⁵⁾では、3～5分と規定されたブレインライティングの技法があり、本研究では中間の4分間とした。実習開始前と実習終了後に実施した。

2) ブレインライティング (Brain Writing : 以下BWと略す)を用いたほめ言葉の創出ワーク前と創出ワーク後の調査

参加対象者を無作為に4～5人に分け、グループがEIQとCIQで均等となるように無作為に2グループに分けた。また、EIQとCIQの2グループに分けたのは、看護で特に重要として創造性や共感性という言葉がよく用いられるために代表的なIQを選択した。

BW法を用いたほめ言葉の創出ワーク前(以下：調査②)と創出ワーク後(以下：調査③)の調査を実習開始前と実習終了後に実施した。また、実習終了時には、感じたこと、学んだことの記載も依頼した。

調査②は、各々をEIQとCIQに割り当て、ほめ言葉の記入を依頼した。そして、EIQの例には「人の気持ちがよくわかるね。」「思い

やりがあるね。」のほめ言葉の例を記入したワークシートを用いた。また、CIQの例には、「さすが、君らしい考えだね。」「たくさんのアイデアを思いついたね。」の例を記入したワークシートを、BW法をする前に渡して、あらかじめ持っているほめ言葉と同じ方法で、記入を依頼した。あなたが、妊産褥婦さんをほめるときどのようにほめますか？実習で妊産褥婦さんと接している場面をイメージして、できるだけくさんの割り当てられたEIQあるいはCIQのほめ言葉を箇条書きで書いてください。と説明して、記入を依頼した。

調査③では、調査②と同様な方法で、BW法を実施した後に記入してもらうように依頼した。EIQとCIQ別にグループが実習前後でもわかるように連結可能番号化とした。

3) BW法

BW法とは、日本創造学会⁵⁾でも使用されている方法である。3つずつアイデアを各自が考え、3～5分以内で用紙に記入し隣に回すというプロセスで進行していく方法である。表1は、CIQにおけるBW法を行う際に使用したワークシートを示した。EIQのワークシートも同じような表を使用した。

BW法を行うには一定のルールがあり、そのルールは、参加者はアイデアを出すことだけに専念して、判断は後ですればよいこと、また発想は自由で量をたくさん出せばよいということを説明した。3～5分の時間で1段目のセルにそれぞれ違う内容を書いて、同じグループの隣の人に渡す。2段目の参加者は、1段目に書かれていないほめ言葉を記入する。これを繰り返しセルが埋まるように記入してもらうことを説明した。

表1 ブレインライティング法ワークシート

CIQ(創造性能力)のほめ言葉 例)さすが、君らしい考えたね。たくさんのアイデアを思いついたね。			
1段目			
2段目			
3段目			
4段目			
5段目			

4. 分析方法

分析は、ほめ言葉数と内容を実習前と実習後で比較し、対応のある t 検定と χ^2 検定を用い、 $p < 0.01$ をもって有意差があるとした。また、内容の分類は、A.B. スクローム⁴⁾による人が持つ7つの能力の観点から、「AIQ, CIQ, DIQ, EIQ, JIQ, MIQ, PIQ」を用いて分類した。分類は、研究者3名の一致をもって決定した。その後は、日本創造学会の教育学の専門家に妥当性を確認してもらった。

5. 倫理的配慮

本研究は、研究者の関連する大学の倫理審査委員会の承認(承認番号 10035)を得て

行った。また、対象者には目的、方法、参加の自由、学業上の成績に関係がないこと、個人情報保護等調査参加依頼書をもとに強制力が働かないように口頭で説明した。なお、実習前と実習後に関連させるために、連結可能番号化を行うことも説明した。

IV 結果

1. 対象者の年齢

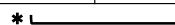
対象者34名の平均年齢は 24.1 ± 4.0 歳であった。

2. 実習前と実習後のほめ言葉数

実習前と実習後のほめ言葉数の平均±標準

表2 実習前後のほめ言葉数の比較

項目	実習前 (平均±SD)	実習後 (平均±SD)
調査Ⅰ	7.6±2.3 *	10.5±4.2 *
調査Ⅱ	7.4±4.4 *	11.2±3.8 *
調査Ⅲ	11.1±4.3	17.0±4.0

* 

* : $p < 0.01$

準偏差を表2に示した。表2に示すように、調査①におけるあらかじめもっているほめ言葉数は、実習前は7.6 ± 2.3、実習後10.5 ± 4.2であった。調査②では、無作為にEIQとCIQの2グループに分けて、BW法を用いたほめ言葉の創出ワーク前であり、EIQとCIQの2グループ間の差はなかった。EIQとCIQについて説明を行った後に、助産学生は、EIQとCIQの言葉を考えて記載するほめ言葉の数で、実習前7.4 ± 4.4、実習後11.2 ± 3.8であった。調査③では、BW後のほめ言葉数であり、実習前11.1 ± 4.3、実習後17.0 ± 4.0であった。実習前と実習後とも調査①や②よりも調査③のBW後で有意にほめ言葉数が多かった ($p < 0.01$)。また、調査①～③ですべてにおいて、実習前よりも実習後において、ほめ言葉数が有意に多かった ($p < 0.01$)。

3. 実習前と実習後のほめ言葉の内容分類 実習前と実習後の調査①あらかじめもって

いるほめ言葉の総数は、実習前219、実習後324について、内容を分類し、実習前と実習後の比較を図1に示した。実習前AIQ：13(5.9%)、実習後8(2.5%)であり、CIQ：実習前2(0.9%)、実習後4(1.2%)、DIQ：実習前57(26.0%)、実習後74(22.8%)、EIQ：実習前1(0.5)、実習後0、JIQ：実習前5(2.3%)、実習後7(2.2%)、MIQ：実習前76(34.7%)、実習後157(48.5%)、PIQ：実習前65(29.7%)、実習後74(22.8%)であった。実習前と実習後で比較すると、MIQについては、実習前より実習後の方が有意に多くのほめ言葉がみられた ($p < 0.01$)。MIQ以外のIQについては、実習前と実習後の差を認めなかった。また、実習前と実習後ともに、DIQ、MIQ、PIQと他のIQと比較して、有意に他のIQより多く出現した ($p < 0.01$)。また、DIQとPIQは、実習前よりも実習後との比較では有意な差を認めなかったが、実習前よりも実習後の方が少なかった。

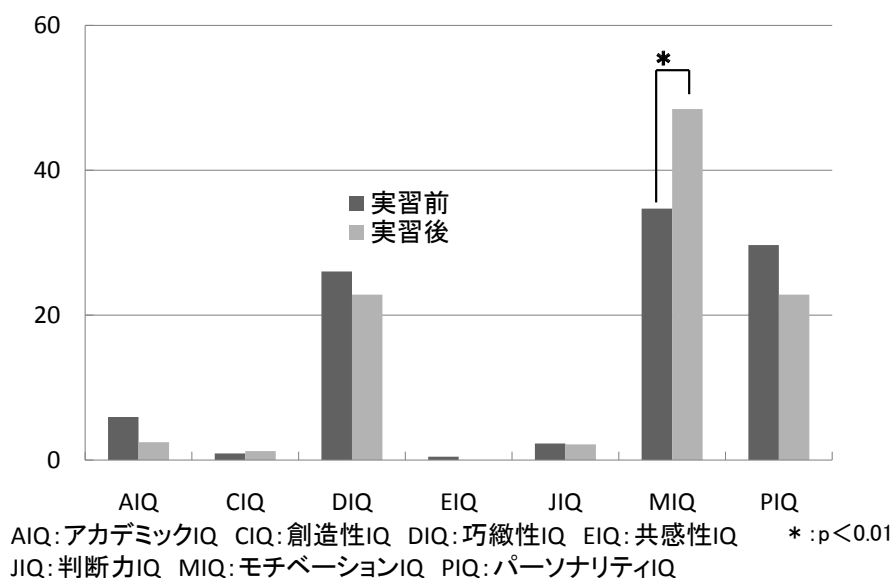


図1 実習前後のほめ言葉の内容分類

表3 ほめ言葉の内容

分類	内容
アカデミックIQ: AIQ	1. 頭の回転が早いですね 2. さすがですねたくさん知っていますね
創造性IQ: CIQ	素晴らしい考えですね
巧緻性IQ: DIQ	1. 昨日できなかったことが今日できてすごいですね 2. 上手にいきめていますよ
共感性IQ: EIQ	一緒にやれましたね
判断力IQ: JIQ	順番通りできましたね
モチベーションIQ: MIQ	1. 赤ちゃんのおっぱいを欲しがるサインに気付けていて素晴らしいです 2. ○○さんの抱き方が上手なので赤ちゃんもだいぶ安心しているようですね 3. 育児を毎日頑張っていてとても素晴らしいですね
パーソナリティIQ: PIQ	1. 笑顔が素敵ですね 2. 勉強熱心ですね

4. ほめ言葉の内容

ほめ言葉の内容は、A.B. スクロームの人がもつ7つの能力の観点から分析した。代表的なほめ言葉を表3に示した。AIQは、「頭の回転が早いですね」「さすがですねたくさん知っていますね」、CIQは、「素晴らしい考えですね」、DIQは、「昨日できなかったことが今日できてすごいですね」「上手にいきめていますよ」、EIQは、「一緒にやれましたね」JIQは、「順番通りできましたね」、MIQは、「赤ちゃんのおっぱいを欲しがるサインに気付けていて素晴らしいです」「○○さんの抱き方が上手なので赤ちゃんもだいぶ安心しているようですね」「育児を毎日頑張っていてとても素晴らしいですね」、PIQは、「笑顔が素敵ですね」「勉強熱心ですね」であった。

実習前にほめ言葉の調査を行った後、助産診断・技術学実習が開始するという状況であった。実習終了後の調査後に、本調査に参加した助産学生は、「実習前にこの調査に参加していたので、実習中に、どうほめたらいいだろうと考えるきっかけになり、常に、妊産褥婦に主体性をもってもらうためにはどの

ような言葉がいいだろうと考えながら実習を行った。」という感想を記載していた。しかし、一方では、「結局、目の前の分娩助産実習をすることに一生懸命になって、どのようなほめ言葉を使って言葉かけをしていいのかわからなかったから、指導助産師の言葉かけの中で気に入ったのがあったので、真似をしてしまった。」との記載もあった。

V 考察

1. 調査①、調査②および調査③におけるほめ言葉の検討

弓野³⁾らの研究においては、BW法を教育技法の1つとして実施したことで、集団的思考訓練が有効であったこと、そして、ほめ言葉を増やす経験をしたことがほめ言葉の創出数を伸ばし、個別的能力つまり創造性を意識してほめ言葉を考えることができていたと報告していた。本研究においても、調査①、調査②よりも調査③において有意にほめ言葉の数がより多く伸びていて、弓野らと同様であった。つまり、調査①のあらかじめもっていたほめ言葉がBW法を通じて調査③のほめ

言葉が、多くなっていたことはBW法の効果があったということが考えられる。

今後は、創造性を高めるためにも、BWのような技法を積極的に、取り入れていく必要があることが示唆された。

2. 実習前と実習後のほめ言葉創出数の比較

実習前後のほめ言葉創出数の比較では、調査①～③までですべて実習前より実習後に有意に増えていた。また、ほめ言葉の創出数についても、実習後の方が実習前に比較して有意に高かった。このことは、助産学生の生活背景などの他の要因も考えられる。しかし、今回、助産学生の生活背景についてなどの調査は行っていない。そのために、生活背景がほめ言葉の創出に及ぼす影響については今後の課題であると考えている。

しかし、今回の結果から、実習成果が一要因であったと考えている。服部⁶⁾らは、助産学実習において、特に分娩介助の経験を通して、分娩を援助する意味を学び、分娩は、産婦主体であることを認識していると報告している。助産教育において臨床の場で妊産褥婦と接しながら学ぶことは、助産学生の成長につながる意義のあるものである。しかし、その一方、指導助産師の助産学生に与える影響も多大である⁷⁻⁸⁾。助産学実習では、分娩介助を経験していく。助産学実習の分娩介助時の学生の学びやその変化は大きいものである⁸⁻⁹⁾。宮澤ら⁸⁾の調査では、分娩介助の1例目では、未熟な助産技術ばかりが中心となり、自分にできないことが多いことや対象者に対してどのように関わるかについてはほとんど考えられない状況であることがあげられていた。今回、本調査に参加した学生についても、宮澤らと同様であり、実習前においては、産婦に対してどのように関わるかほとんど考えられない状況であった。実

習終了後は、10例の分娩介助ができたことから、少しずつ産婦を中心としてとらえることができるようになっていたと思われる。また、実習中、指導助産師の産婦への関わり方を模倣することで、産婦に対する関わり方を実施していることも明らかとなった。

3. ほめ言葉の内容分類

調査での記載されたほめ言葉を、人がもつ7つの能力の観点より分類を行った。ほめ言葉の内容数についての実習前後の比較においても、実習前よりも実習後の方が多かった。

実習前後においてMIQが高かったことは、助産の特徴であると思われる。産婦に関わり、分娩介助に臨むため産婦のモチベーションをあげるような関わり方をするために、MIQ(モチベーションIQ)が高くなるのは当然のことであると思われた。DIQ(判断力IQ)、PIQ(パーソナリティIQ)が実習後に高いのは、対象者の状況に対する判断ができるようになったこと、その人らしさを認める言葉かけができていたことを示すものである。これらは、助産学生が、対象者のその人らしい分娩、育児への支援につながる関わりができていたことを示唆する結果である⁷⁾と考える。したがって、ほめ言葉の内容については、実習の効果がその1つの要因であったと考えられた。また、実習前に比較して実習後にDIQとPIQが低下しているが有意差が見られなかったことから今回は分析をしなかった。今後は、数を増やした分析が必要になると考える。

また、他のIQが実習前より実習後少なかった。このことは、アカデミック、共感性、創造性、モチベーションそして判断性が低いことを意味し、妊産褥婦に対し共感やその人らしさを認める言葉かけが少なく、ほめ言葉を想起できず、パターン化したほめ言葉であっ

たと考える。

今回は、言葉を中心の調査であったため共感的な態度については実際に助産学生が使用したほめ言葉が、妊産褥婦にどのように影響するのかについても、実際の妊産褥婦の反応などを参加観察していくことも必要であり、今後の課題であると考え。

4. ほめ言葉の内容

代表的なほめ言葉については、表3に示した。

実習後 MIQ のほめ言葉は、「赤ちゃんのおっぱいを欲しがめるサインに気付けていて素晴らしいです。」「〇〇さんの抱き方が上手なので赤ちゃんもだいぶ安心しているようですね。」「育児を毎日頑張っていてとても素晴らしいですね」等であった。実習後に、同じような言葉が増えていた。これらの言葉は、助産学実習における助産学生の特徴のあるほめ言葉が見られたと考える。そして、MIQ のほめ言葉は、少なくとも妊産褥婦に自尊感情を高めるものではないかと思われる。今後は、助産学生のほめ言葉が、妊産褥婦にどのような影響を与え、妊産褥婦の自尊感情や自信がどのように変化したかについては今後の課題であると考え。

実習後 DIQ では、「昨日できなかったことが今日できてすごいですね」や「上手にいきめていますよ。」などの言葉の記載があった。PIQ は、「笑顔が素敵ですね」や「勉強熱心ですね」のほめ言葉があった。しかし、ほめ言葉数は少なくなっていた。学生の記載から、実習中に、「どうほめたらいいだろうと考えるきっかけになり、常に、妊産褥婦に主体性をもってもらうためにはどのような言葉が理想だろうと考えながら実習を行った」という感想があった。このことは、BW 法を実習前に行ったことが、対象のことを考えながらほ

めるということを考えるきっかけになったとも考える。今後も、実習前に、助産学生に、BW 法を用いた授業を行うことも教育の1つであり、必要ではないかと思われた。

しかし、一方では、「結局、どのようなほめ言葉を使って言葉かけをしていいのかわからなかったから、指導助産師の言葉かけの中で気に入ったのがあったので、真似をしてしまった」との言葉からもわかるように、助産学実習の中でも特に分娩介助実習における臨床の指導助産師からの影響は大きいものと思われる。そこで、臨床の指導助産師のほめ言葉についても調査する必要があると考える。また、今後は、どのようにしたら、助産学生は、妊産褥婦の主体性を促すようなほめ言葉を実習前に考え、そして、実習中にスムーズに妊産褥婦に対するほめ言葉を使えるようにするために、工夫しながら、実習前の授業、演習等での動機づけを考えていく必要があると示唆された。

VI 結論

本研究によって以下のことが明らかとなった。

1. ほめ言葉数は、あらかじめ持っているほめ言葉の調査、BW 法を用いたほめ言葉の創出ワーク前調査よりも BW 法を用いたほめ言葉の創出ワーク後の調査において有意にほめ言葉の数が多く BW 法の効果があった。
2. ほめ言葉数は実習前より実習後に有意に多く認められた。
3. MIQ 157(48.5%) が他の IQ より有意に多く見られた。MIQ が高かったことは、助産の特徴であると思われる。他の IQ が実習前より実習後少なかったことは、妊産褥婦に対し共感やその人らしさを認める言葉かけが少なく、ほめ言葉を

想起できず、パターン化したほめ言葉であつたと考える。

今回は言葉を中心とした調査であつたため共感的な態度については、今回の調査の中では明らかにできなかったため今後の課題であると考えている。助産学実習において、妊産婦自身の主体的な分娩育児支援のためには、指導助産師の用いるほめ言葉についても、今後検討していくことが必要である。

謝辞

本研究の調査にご参加いただいた助産学生の皆様に深く感謝いたします。

なお、本論文は、第22回日本看護学教育学会学術集会において一部を発表した。

本研究は、聖隷クリストファー大学共同研究費を当てて実施したが、費用を公正に使用した研究であり、本研究の公正さに影響を及ぼすような利害関係は一切生じていない。

引用・参考文献

- 1) 佐藤道子, 石塚淳子, 岸あゆみ, 他. 創造性を育成するための看護教育方法の開発 (その1), 聖隷クリストファー大学看護学部紀要. 2007, No. 15, p. 27-38.
- 2) 青木直子. ほめるに関する心理学的研究の概観, 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要, 心理発達科学, 2005, No. 52, p. 123-133.
- 3) 弓野健一, 山崎彩乃. 個性的能力と創造性に関する教師と大学生のほめ言葉の比較, 日本創造学会論文誌. 2010, Vol. 14, p. 69-86.
- 4) A. B. スクローム著, 岩瀬章良編訳. 7つの能力で生きる力を育む, 京都, 北大路書房, 2000, p. 1-54.

5) 創造性について. “創造性の重要性”. 日本創造学会.

<http://www.japancreativity.jp/juyou.html>
(参照 2013.6.15)

- 6) 服部律子, 堀内寛子, 谷口通英, 他. 本学における助産実習での学びの内容, 岐阜県立看護大学紀要, Vol. 7, No. 2, p. 3-8.
- 7) 徳留静代, 濱松加寸子, 富安俊子. 助産学実習における専任臨床指導者配置の影響 - 学部助産師課程学生の不安調査の比較から -, 静岡県母性衛生学会誌. 2009, Vol. 51, No. 3, p. 223.
- 8) 宮澤美知留, 清水嘉子, 松原美和, 他. 助産実習における分娩介助時の学生の学びとその変化, 長野看護大学紀要. 2012, No. 14, p. 13-23.
- 9) 澤田貴美子, 山内まゆみ. 助産師基礎教育における卒業時到達目標の検討 第2報助産学生の意見からの分析, 母性衛生. 2010, Vol. 51, No. 3, p. 166-167.

連絡先

富安 俊子
〒 856-0835
長崎県大村市久原 2 丁目 1246-3
活水女子大学 看護学部看護学科
TEL : 0957(27)3005
FAX : 0957(27)3007
E-mail : tomiyasu@kwassui.ac.jp

An n investigation into words of praise given by midwifery students to pregnant, birthing and puerperal women

Abstract

The role of midwives is to provide support for the subjective delivery and child-rearing of pregnant and parturient women. Speaking to women in a coordinated manner is necessary in order to achieve this and above all, compliments are very important. If midwifery students use Praise words in appropriate scenarios, it is believed that the confidence and self-esteem of subjects may be enhanced, thereby leading to subjective delivery and child-rearing. Accordingly, with 34 midwifery students attending University A as the subjects, an investigation was carried out regarding the number and content of praise words given before and after practice. Investigation (1) Praise words that have already been given; investigation (2) Praise words prior to brain writing (BW); and investigation (3) Praise words after BW, were carried out before and after practice. An analysis was carried out using a t-test and χ^2 -test, while the contents were classified using the A.B. Skromme method. As a result, the number of praise words that had already been given were: before practice: (1) 7.6 ± 2.3 , (2) 7.4 ± 4.4 , (3) 11.1 ± 4.3 ; and after practice: (1) 10.5 ± 4.2 , (2) 11.2 ± 3.8 , (3) 17.0 ± 4.0 , with after practice significantly outnumbering before in all investigations. The number of praise words described before practice was 219 and 324 after practice, with MIQ being higher than other IQ both before and after practice. A high MIQ is characteristic of midwives, and this is believed to evoke general praise words.

Key words : Midwifery students, Praise Words, Brain Writing, Creativity